

【旧約聖書日課】創世記 13章1～18節

1アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。2アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。3ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。4そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。

5アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。6その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。7アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

8アブラムはロトに言った。

「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。9あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

10ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。11ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。12アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。13ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。

14主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。

「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。15見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。16あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。17さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

18アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの櫟の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章7～12節

7ヨハネは、フェリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。9『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。10斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。12そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

「石ころからアブラハムの子!?!」【こども説教のために】

少し気が早いようですが、今月末から始まる「アドヴェント（待降節）～クリスマス（降誕祭）」に向けて、子どもたちと「リース」づくりを始めます。公園で拾ってきた木の実など自然のものを材料にした、その名も「ナチュラルリース」です。ちょうど「収穫感謝」の季節ですから、神がお造りくださる世界の中から新しく造られた「実り」を手にし、飾り付けることを通して、共に神の創造の御業を貴ぶ思いを育みたいと考えています。子どもたちには、機会があれば自分で「木の実」などを拾って持ってくるように案内しましたが、何か持ってくるでしょうか。わたしが秘かに期待しているのは、一人くらい綺麗な「石ころ」を見つけて持ってくる子がいるのではないかと、ということです。命のかけらもないように見える冷たい「石ころ」ですが、それもまた神の創造の御業によって生み出されたもので、そこに神の御心から見た美しさがあるはずだからです。

福音書日課（マタイ3章）で、主イエスに洗礼をお授けすることになった「洗礼者ヨハネ」が、「神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる」と言っていました。

アブラハムは、「聖書」の第一巻「創世記」に伝えられる人で、ユダヤ人だけでなく中東の人たちの多くが自分たちのご先祖と考えていた人物です。そのアブラハムの「子孫」であることを、ユダヤ人は誇りにして、「アブラハムの子」と自称していました。それは、ご先祖アブラハムが偉大な人物だったということもあるかもしれませんが、何よりも、アブラハムを「信仰の父」と考えていたからです。神を信じて御心を尋ね求めて生きる者、あるいは、神の御心と同じ心で語り、振る舞うことを志して生きる者。そのような信仰に生きる者にとって、アブラハムは模範を示した人物だと考えられていたのです。

ヨハネの言葉は、主イエスのご生涯の中で実現し始めました。「アブラハムの子」と思われていなかった者たちが、「アブラハムの子」として生き始めたのです。わたしたちも、その一人として呼び集められて来ているのです。

ロトの選択

洗礼者ヨハネが「神はこんな石からでも…造り出すことができになる」と言った「アブラハムの子」ですが、「創世記」に物語られるアブラハムは、自身の跡継ぎとなる子を得るために、大変な苦勞をし、紆余曲折を経験した人物として描かれています。

「創世記」でアブラハムの物語は、彼が 75 歳のときから始められています。それは、彼自身の父テラが死んだ後、父の家を出て新しい地を目指す旅を始めたときでした。そのとき、彼には子がいませんでした。遊牧民の族長として家族と家畜、それに使用人らに責任のある彼は、自分が死んだ後にも一族が一つになってやっていけるよう、きちんと後継者を設けておく必要があったのです。子がいれば、当然、第一の候補になっていたでしょうが、いなければ、代替りの後継者を育てておく必要があります。彼は、父の家を離れて独立するに際して、自らの後継者候補として、兄弟の子、甥のロトに白羽の矢を立てていたのです。彼が跡を継いでくれれば、だれも文句はなかったでしょう。ところが、ロトは、アブラハムの後継者としてその家に留まり続けることはありませんでした。アブラハムの家を出て行くことになったのです。

その経緯を物語るのが、旧約聖書日課（創世記 13 章）です。

アブラハムは、ここでは「アブラム」と呼ばれています。それが、父から与えられた名でした。「アブラハム」の名は、後年、神から与えられたのです。それは、このときの彼が、父から自立しきれていないこと、それゆえに、自ら神の御前に進み出て行き、主体的に御心を尋ね求めていく「信仰の父」の姿を示していないことを、暗に語っているのかもしれませんが。何となれば、彼は、ロトとの間で、家畜を飼う者たち同士の争いを平和裏に解決し、和解をもって共存していくことに失敗しているのです。彼は、ロトと争わないために、互いに離れ、別の道を行くことを選択しています。

争わないために、離れて別の道を行く。それは、分別のある大人の知恵にも思えます。そうするしかない場合もあるでしょう。けれども、それは、決して本当の解決にはなりません。互いに赦し合い、和解するまでの間、問題が先送りされるだけなのです。それでも、時を設けるために、しばらくの間、離れているしかないとしたら、別の道を行く者を引き留める術はないかもしれません。

アブラムは、ロトに自らの行く道を選び取るようにさせました。そうすることが良いと考えたのでしょう。けれども、そのように自ら選び取らせた道が、その者にとって最善の選択肢であるとは限りません。

ロトは、自ら目を上げてすべての選択肢を一望した上で、一つの道を選び取りました。それは、**見渡すかぎりよく潤った**ところでした。現代風に言えば、コスパが良く、将来性もある分野だったのです。ただ、そこに隠されていた邪悪なものには、思いが至らなかったのかもしれませんが。いいえ、そのような負の側面を補って余りある利益がそこにはあると、考えたのではないのでしょうか。

アブラムは目を上げたのか？

アブラムの姿は、ロトとは対照的です。ロトに自分の道を選ばせたアブラムは、自らの行く道を自ら選ぶことをしません。ロトが自ら選んだ道と正反対の道を、アブラムは自分の行く道としたのです。

そこに、アブラムの人生における勝算はあったのでしょうか。まったくなかった、ということはないのでしょうか。彼も、一族を率いる族長です。路頭に迷わせてはいけない守るべきものがありました。そして、守り続けるために、ロトに代わる後継者を立てることもしなければならなかったはずです。結果として、「創世記」が物語るところによれば、アブラムは、この後、ロトよりも成功を収めることになるのです。条件の悪い道を強いられても、そこに成功に至る道を見いだす実力を、彼は備えていたのでしょうか。

そうであれば、アブラムは、ロトと別れた後、顔を上げて、自分のこれから進み入るところをしっかりと見渡し、見据えて、自分の切り拓く将来を心に思い描いたのかもしれませんが。テレビ番組風に言えば、こここそが「逆転人生」の見せ場なのです。

ところが、「聖書」は、そのように彼の物語を描きはしないのです。彼が持っていたかもしれない不屈の精神に、聖書は関心がありません。ただ、その時アブラムには主なる神の言葉が示されたと、描くのです。

「さあ、目を上げて…見渡しなさい。」

アブラムは、そのとき、自ら目を上げて見渡したのではなく、神に促されて目を上げ、目の前の風景を見渡した。それが、アブラムの姿として描かれていることです。

そこでアブラムが目にした風景は、どのようなものだったのでしょうか。自ら目を上げてみたときと違った風景だったのでしょうか。同じ風景だったのかもしれませんが。同じ現実が、目に入ってきたのかもしれませんが。けれども、そこは、神がご覧になられているところであったはずです。神が見渡される世界の隅々にまで目を向けるようにと、アブラムは促されたのです。神の御心が向けられるところに心を留めるようにと、彼は導かれたのです。

実際に、彼がどれだけ、その促しに従うことができたのか、導かれた先に主の御心を見ることができたのか、それは分かりません。けれども、ここに、アブラムの行く道があるのです。アブラムに続く者の行く道があるのです。いいえ、神に名を呼ばれた者「アブラム」の行く道が、拓かれるのです。

「アブラムの子らよ、悔い改めよ。目を上げて、神のご覧になられる世界を見渡せ。これらすべては、あなたに与えられている。神に似た者として創造されたあなたが、御心を行うために、すべての者が御心を行う者として生きるようになるために、全地が神の創造された豊かな美しい世界になるために、あなたに、あなたがたに、これらすべては与えられている。」

主イエスが、この道を切り拓いてくださったのです。わたしたちを、石ころのような存在から「アブラムの子」として呼び出してくださったのです。